

## 11・29「リニア・シンポジウム」(続)

開会にあたって、郡健二郎学長が挨拶された。公立大学法人としての名市大が名古屋市との連携をさらに深めること、大学としてまちづくりに積極的に関わることなどを熱く語った。学長が参加され挨拶されるとは「想定外」であり嬉しかった。

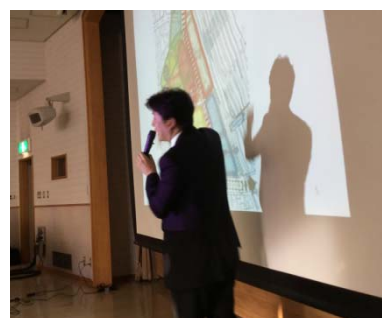
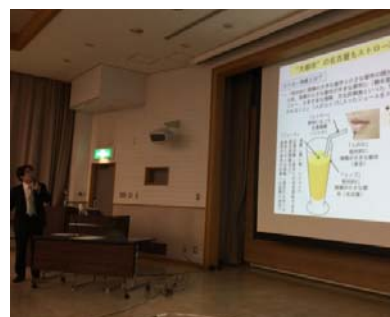
シンポジウムでは、まず共立総合研究所の江口副社長が「リニアインパクトは名古屋を変えるか」と題して講演した。江口さんの主張はレポートなどで読んでいたが、スライドを駆使した講演は説得力があった。写真のようにストロー現象について分かりやすく説明し、「名古屋は東京へのストローを前提に都市戦略を考えるべき」と力説する。この点は同感であると発言した。

そして、リニアが名古屋にもたらす最大のメリットは「羽田(成田)が便利になること」、リニア開業による駅西開発は、名古屋市全体の「東高西低」化に歯止めをかけるチャンスだと述べる。名駅地区を含めた「東西格差」については、パネル討論でも重要な論点となった

人文社会学部「社会調査実習」林班は、駅西商店街の変動を中心に報告した。名古屋市の中心市街地の開発政策をフォローし、駅西商店街へのヒアリング等から「リニアによる開発に期待せざるを得ない」現実を示す。

太閤通口まちづくり協議会の田中さんは、まず名駅西口の歴史と現状を映像で分かりやすく紹介した。2年半前に設立された「太閤通口まちづくり協議会」設立趣意書などの資料により、椿地区のまちづくりの歩み、「椿フェスタ」などのイベントについて語った。

これらの講演と報告をもとに、パネル討論が行われた。とくに名駅の東西の関係、「東西格差」に議論が集中した。田中さんはこれまで光が当たらなかった駅西(駅裏)が、リニアを契機にすこしでも注目が集まることを期待する。私は駅西には「後発の利益」があり、今後に可能性(ゆとり)があるので、まちづくり協議会の活動がますます重要と述べた。名古屋市のまちづくりを担当する幹部も参加していたので、今回のシンポジウムにより地元住民と名古屋市との連携が深まることを期待したい。



(2014年12月5日)